伝統宗教の「次世代教化システム」
――教育界との比較と事例検討

川　又　俊　則

はじめに

2050年までに総人口が9,000万人に縮小し、高齢化率も約40％となる予測に対し、「地方創生」として過疎地域の若年人口減少を食い止める政策が議論され、展開されている。だが、「極点社会」とも呼ばれる現況は続いている。

このような社会変動の中で、寺院や神社など宗教集団を活かすような提案を見ることはほとんどない。また、参照力の高い社会学的な過疎研究［山下 2012］［徳野他 2014］でも宗教は等閑視されている。

しかし、アメリカの過疎研究ではキリスト教会の地元密着型が安定する実態が報告され［Wuthnow 2005］、欧米の新宗教でも、信者の高齢化と信仰継承の課題が問われている［Barker 2011］。このように、よく考えれば、人口減少や超高齢社会という社会変動において、宗教が無関係ということはないだろう。そしてそれは、筆者たちのように関心を持つ者が行ってきたこれまでの研究でも示されている。

本稿は、４人のメンバーによる、４年間の科学研究費補助金研究「伝統宗教の『次世代教化システム』の継承と創造による地域社会の活性化」について、現時点まで調べた資料をもとに現状分析を示す中間報告的な論考である(1)。

まず、本科研グループメンバーの研究背景を説明しよう。

小林奈央子は、東海地方の木曾御嶽講［小林 2013b］、尾州鷹羽講という7,000世帯の巨大講の継承成功理由など、宗教講に関する考察を発信してきている［小林 2014］。冬月律は、神社界の過疎問題を鳥瞰した論考［冬月 2013・2016］、あるいは、具体的な事例研究［冬月 2015他］を刊行してきた。郭育仁は、地域振興の視点で様々な分析をしてきたが、神社の氏子など宗教の担い手がかかわっている実態の考究も示した［郭 2012］。代表者川又も、三重県内各地で、仏教寺院・キリスト教会のみにとどまらず、青年会、婦人会、宗教講などの実践も考察してきた［川又 2016ab 他］。この４人がこれまでの調査経験を踏まえ、再度、本テーマで調査研究を行うことにした。

宗教集団は、熱心な信者が次世代継承を繰り返すだけではなく、関心ある一般の人へ拡大したり、不熱心な信者であっても何らかの契機により信仰を深めるなど、信仰は継承され、拡大することもある。たとえば、三重県にある私立の愛農学園農業高校は、2018年現

在、創設55年を迎える全寮制キリスト教系学校だが［川又 2009］、入学前は未信者だった生徒たちが、毎朝、聖書を読み、朝会を経験し続けた結果、後日、農業を営み、数十年近くの小さな教会を支えていたなどの例もある。逆に、人口移動や不信心な人びとの増加により、縮小あるいは途絶ということもあるだろう。

筆者は近年、主に２つの科学研究費補助金研究で、過疎地域の宗教集団の現代的意義を発見し、福祉と宗教の関連性の高さを実証してきた(2)。それらを基礎に置き、本研究では、過疎地域と宗教を「教化システム」の観点で考究したい。筆者は、宗教による地域ネットワークの拠点機能や地域創造の可能性があると思っている。本稿ではその第一歩として、教育界のシステムと宗教界のシステムを概観し、また、筆者たちが「次世代教化システム」と見なしているいくつかの事例検討を報告し、本科研の今後の見通しを示したい。

１．本稿の射程

本科研で筆者たちは、宗教の教職者を養成する大学や神学校などだけを「次世代教化システム」とは見なしてはいない。寺院・教会が檀家・信者を問わず地域のこどもたちに場所を提供してきた日曜学校、檀家や信者たちが寺院・教会を支え、地域社会と触れ合う壮年会、婦人会なども、含まれていると考えている。宗教系の中学や高校も宗教者を育てるというより、宗教に親しみを持つ生徒を育てているが［川又 2009］、これも含まれていると解している。これらは、メンバーシップが主に年齢（や家庭内の地位）で定まる年齢階梯集団でもある。専門的な宗教系学校以外でも、宗教者や信者たちを育てていく組織・集団全体を、広く「次世代教化システム」と呼ぶ。

かつて、全国の農山漁村で青年団などが機能し、地域のしきたりやつきあいなど社会人基礎力が学ばれていた。だが、産業構造変化や若年層の都市移動で、もはや機能していない。他方、伝統的宗教集団は子どもたちに活動の場を提供し、若手宗教者は自ら学ぶ場を地域の人びとととともに作っている。仏教・神道・宗教講（民俗宗教・仏教）、およびキリスト教など宗教集団が行ってきた宗教者（後述では宗教教師）、一般の檀家・信者への信仰継承のあり方が、過疎地域で「次世代教化システム」となり、若年層・壮年層が地元に定着している。それは信仰継承に結びつく。

おおよそ高度経済成長期以前、人口移動が頻繁でなかった時代、農山漁村等には同様の年齢階梯集団が多数存在し、若者はそれを経験し、成長していった。現代でも、鳥羽市答志島の寝屋制度など、維持されている所もわずかにある［川又 2014a］。だがそれは例外で、宗教集団でこそ、年齢階梯集団での教育がなされているのだろう。民俗学で過去のものと見なされる年齢階梯集団に再度、焦点を当てるのが本研究であり、宗教集団による「次世代教化システム」の一般への拡張可能性を検討したい。

その際、ジェンダーの視点を取り入れ［川又 2006］［小林 2011・2013a］、一般社会で当たり前の男女共働が、現代宗教界でどういう実態にあるかも注目したい。それらの知見をもとに、先駆的な事例が見られる集団や地域を中心に、この継承と創造を見出すことを目的にしたい。筆者は、現代の宗教界を支えているのは過疎地域で信仰を守ってきた昭和一桁生まれの人びとだと認識している［川又 2014b］。そして、それらの人びとにアプローチしてきた［川又 2015］。それらを踏まえ、本研究を進めていく。

以下、２節で教育界のシステム、３節で宗教界のシステム、４・５節で本科研の調査で得られた「次世代教化システム」事例を報告し、今後の方向性をまとめたい。

２．教職における養成・採用・研修システム

宗教者も、それぞれの宗教・宗派において、「教師」として働く。そうすると、いわゆる教育界と似ている部分は多くあるだろう。また、宗教者養成自体、後述するように、大学などの高等教育機関で行うことが多い。そこで、教育界のシステム、つまり、教職における養成・採用・研修のシステムを理解しておくことは必要だろう。本節でそれに触れておく。

現代日本では、基本的に、教諭として小学校等で働く場合、大学や短期大学など、いわゆる「教職課程」を擁する高等教育機関において、編成された教育課程の必要な科目を単位履修し、いわゆる教育実習も行い、必要十分な条件を満たした場合、卒業時に教員免許状を取得できる制度となっている。そして教員採用試験に合格し、採用された自治体や私立学校等で着任し、教諭として学校現場で働きだす。だが、教員免許状を持ち、採用され、こどもたちにとっては、同じ「先生」という立場だとしても、それぞれの持つ教育力は、新人とベテラン教諭とで格段の差があることは否めない。そこで、現職者たちは、採用前研修、初任者研修、校種別研修、教員免許状更新講習など、多種多様な研修をし続け、その職にある間、教育基本法第９条「自己の崇高な使命を深く自覚し、絶えず研究と修養に励み、その職責の遂行に努めなければならない」を全うすることになる。

文部科学省では、教員の養成・採用・研修の一体的改革推進事業について、「これからの学校を担う教員の資質能力の向上について（答申）」（中教審第184号、平成27年）を示している。現在の学校教育の根幹を示す重要なものである。教員の資質能力向上は、「養成・採用・研修」の三つの局面について、相互に密接に連携されることにより、一層の効果が期待できよう。そして現在、それらに関する調査研究が進められている。

具体的な一例として、以下、三重県について述べる。

三重県は東西南北に広い県であり、教員研修においても「ネット DE 研修」というインターネットを活用したｅラーニングによる研修を平成15年度より取り入れ、すでに約20分野で約250講座がある。採用前研修でもそのいくつかを視聴しレポートにまとめるなどの

課題で活用している。採用後も、自ら関心ある講座を視聴し学べる形になっている。県教育委員会ばかりではなく津市、四日市市など都市部の教育委員会には、養護教諭・栄養教諭などの少数職種（以下、少数職種者）においても指導主事が配置され、教職員に対する研修も丁寧に実施している。県主催の研修でもベテランを配置した個別対応の初年次研修を実施し、他県に引けを取らない体制だと言えるだろう。

三重県では養護教諭・栄養教諭向けの初年次向けの校外研修を毎年12回（４～12月）、養護教諭・栄養教諭向けの職務・職能研修講座を各年４回（例えば平成29年度養護教諭「職務推進研修」は、救急処置・救急体制、学校保健活動、子どもの精神疾患・自殺予防、子どもの生活習慣病など）実施しており、それらを通じて実践的な学びを得ている者も多い。「６年次研と合同」「新任校長と合同」など、他の研修との組み合わせた内容も多い。

筆者は、2017年、2018年と、栄養教諭、養護教諭現職者に対し卒業生訪問して、研修に関してヒアリング調査をした。すると、現職研修の内容には満足しているものの、養成校での学びと教育現場でのギャップをある程度認識していることや、都市部と比べ過疎地勤務者は参加型研修に行きにくい意識を持っている現状を確認した。一人職である養護教諭や複数校を担当している栄養教諭は、ｅラーニングや県主催の全体研修、自主研修などに参加しているが、より多くの研修機会を求めていることもわかった。

養護教諭養成校の鈴鹿大学、栄養教諭養成校の鈴鹿大学短期大学部では、平成21年度より養護教諭・栄養教諭らの教員免許状更新講習を実施し、毎回のアンケートでも高評価を得ている。また毎年度、研修内容を改善してきた。養成校側として卒業生をはじめとする現職者対象に実施してきた研修経験を活かし、一般教諭と比べ、困難さも多い、「少数職種における採用・研修段階」に貢献するために、これに特化した初任者や若手教員の段階での必要な研修の研究開発を進めることにした[(3)]。

少数職種者は一人職種であり、複数校を担当することもあるなど、一般教諭と比べ、研修の機会・環境に恵まれていない。そのため、ネット情報や数少ない研修の機会をどれだけ有効に自らのものにできるのかで、大きく差がつくように思われる。そしてそれは、次節で述べるように、宗教教師にも同様のことが言えるだろう。

３．宗教教師（宗教指導者）の育成

宗教教師（＝宗教指導者、それぞれの宗教集団で資格を持って担当する専門職としての宗教者のこと、以下宗教教師と表記する）は、それぞれの宗教教団の養成機関によって養成される。その課題について、既に先行研究がある。筆者はそれらを参照しつつ、また、一般的に知られている宗教教師養成について、本節で確認しておく。

宗教教師の養成の大前提は、それぞれの宗教を信仰していることである。教員の場合、

信仰など内心に関して問われることがないので、それが大きく異なる。

だがそれ以外は、以下のとおり、似たような制度である。宗教系大学の専門コース、あるいは大学以外での養成機関がある。その教育課程には、教員養成における「教育実習」に相応するような、現場での実習もある。さらに、様々な「修行」の実践を必須としているところもある。そして、それら必要十分な学びを修めた者に対して、宗教教師としての資格が与えられる。

2004年に開催された「現代における宗教者の育成」というシンポジウムと、その後、育成課題をフォローした論文をあわせて単行本として編まれた［国際宗教研究所 2006］に着目しよう。シンポジウムでは、日本基督教団、天台宗、神職、天理教という具体的な宗教ごとの宗教教師養成の実態が報告された。また、育成課題・育成現場ということで、浄土宗、神職、立正佼成会の具体例、さらに、行から出会い、世襲・発心、スピリチュアリティの育みというテーマの論考が収録されている。編集を担当した弓山達也は、「教団人が子弟教育や後継者養成に関して、強い危機感を持ちながらも、あまり多くを語ろうとしないこと」に気づき、それは「宗教系の教育機関でも同じ」であり、だが逆にこの問題に外部の者が発言することに、「それこそ『釈迦に説法』と躊躇いを感じた」とも述べている［国際宗教研究所 2006：191］。しかし、本書に描かれた状況は、10年以上経過した現在も、大きく改善されているとは言いがたいと認識している筆者にとって、この研究課題の基礎として、本書の存在を指摘しておく。

いわゆる宗教系大学と、そのなかでの宗教教師養成に関しては、江島尚俊らの研究グループが、すでに歴史的な展開を辿った２冊の研究書をまとめている［江島他 2014、江島他 2017］。

最初に刊行された『近代日本の大学と宗教』では、明治期から大正にかけて宗派仏教の宗学や教派キリスト教の教学が、いかに近代日本の学制として制度化され、同時に学林や僧堂、修道院などで行われていた宗教者養成が学校に位置づけられるようになったのかを明らかにした。宗門系学校が、学校か宗教施設かという問いについて、すでに明治10年代から20年代にかけて、行政上でも問題となった。宗門系学校が正式に文部省省所管となるのは明治32年８月以降である。明治政府が構築した学校制度と宗教制度の視点から宗門系学校の誕生について論じられた。

その際、「明治初期から（大教院制度・教導職制度上での僧侶養成機関）」「明治10年前後から（宗門系の各種学校＝僧侶養成機関）」「明治32年以降（宗門系学校多くの私立学校が同令認可および徴兵猶予特典の獲得を目的に、同令に定められた内容に基づき組織を整備し、カリキュラムを改編）」という３つの時期に区分された。

続く２冊目では、日中戦争と太平洋戦争における戦時体制下において、「宗教系大学が国家といかに対峙したのか、その実態が明らかにされた。明治以前、寺院や教会、宗教施

設の中で行われてきた「宗教の研究」や「宗教の教育」が、大学という近代的な空間で行われる歴史と意義、そして、宗教系大学が、戦時下、いかなる変質を迫られたのかなど、各章の執筆者によって、読み解かれていく。その際、戦時下を特殊な時代ではなく、近代の結実点として論じられた。

そして、2018年９月の日本宗教学会第77回学術大会のパネル発表では、「大学内宗教者養成の歴史・制度・実態に関する調査報告」というタイトルのもと、現在の状況について、仏教、神道、キリスト教それぞれの実態が報告された。筆者も当日参加し、いくつか質問をした。発表者たちの今後のまとめを期待している。

４．現職者研修システム

本節では宗教教師のうち仏教僧侶についての事例を見ていく。以下で述べるように、儀礼や法要などで檀家の期待に応える僧侶として、読経や所作、あるいは説教などの技術力を高めるために、それぞれの地域で、集団で互いに学び合っている人びとがいた[(4)]。

（１）三重県曹洞宗青年会（三曹青）

社会で活動をし始める若手宗教教師が、20年近く現職研修する三重県曹洞宗青年会「三曹青」は、多面的な活動をしている。

毎年７月に１泊２日の坐禅の合宿を一般に提供するのが、「緑蔭禅の集い」である。男女約30名が、若い僧侶に指導を受けつつ、合計６時間ほど坐る。何もしなくても汗したたる暑い時期に、日常生活を離れ、風を感じ、音を感じたひとときだった。筆者はこの「緑蔭禅」に３度参加し、冬月も2017年に参加した。会長等からの意欲もうかがった。

同会は2013年10月には、「三曹空寂」という創立50周年記念公演を開催した。第１部は「私と仏、生きる。」と題し、１人の男性が仏門に入り、修行し成長する過程を描いた演劇、第２部は三曹青の和太鼓集団「鼓司（くす）」とその指導者による和太鼓演奏だった。聴衆約2,000人を集めた。40歳前後の僧侶が会長を務めている。同団体の活動は大きく展開し、2018年11月の全日本仏教青年会全国大会でも奉納演奏を行った。

同会は20歳代から45歳までの青年僧侶が参加する会である。有志約60名が参加し、『見聞録』というイベント（２、３、４、12月の法要）、「緑蔭禅の集い」、鼓司、そして伝道車（一台の車に布教師と運転者で布教活動をする実践、年10回程度）などを行っている。さらに、災害ボランティア（阪神淡路大震災や東日本大震災など）、雲水カフェ（県内各地で実施している坐禅と法話・茶話会）などもしている。

上下20歳近く年齢差がある幅広い世代が共に活動していくことや、それを通じて、普段知ることが出来ない他地域の状況がわかること、同会を卒業していった老師たちが助言や協賛などの形で青年僧侶の形を支えてくれていることなど、この青年会の活動を通じて多

くを得ている。

筆者はこの活動を見て、かつて農山漁村で年齢階梯による集団、若者組や壮年、老年のグループが、それぞれの段階で仲間と教育や行事等を一緒に経験し、共に成長していったことを想起した。全国各地では、その地域を担う人材を時間をかけて育てていった。現在、僧侶養成の一つとして、このような試みが50年も続けられていたのである。

鳥羽市内（旧町内）の曹洞宗、浄土宗、真宗大谷派、真宗高田派の住職と共に、毎年一月末に市内を托鉢するなど、鳥羽仏教団の活動も行っている。各寺院の日常の活動以外に、このような各地域で宗派を超えたつながりは、各地で調査しているとしばしば伺う。

（2）蒐修会

延暦寺を本山とする天台宗、園城寺を本山とする天台寺門宗とともに、西教寺を本山とする天台真盛宗は、天台宗系三派に数えられる。全国で約420ヵ寺あるうち滋賀県、三重県、福井県の三県に集中する。その福井教区にはおよそ15年前に青年僧侶の研修会「蒐修会」が立ち上げられた。蒐は役立てるために集めるという意味、修は修行の修、すなわち、僧侶としての自覚と智恵を、色々な体験や経験、研修によって幅広く修めるという意味で名づけられた。

福井出身の伊妻智亮師が、叡山学院を経て本山西教寺で、四度加行の指導助手を約10年間務めた。その後、滋賀県高島市の寺院で９年間住職し、福井に戻って越前市（旧武生市）の月光寺の若い住職と着任した。同じ道を歩む者が集まり、互いの立場を理解・叱咤激励し、親睦を深め集まれる場を作りたいと思った伊妻師は、県内の若手僧侶らに声をかけた。賛同者が集まった2004年、約30人の会員、さらに宗務支所、福井教区も応援し、引接寺山主、宗務支所長、布教団・法儀団支部長の４人の参与も加わる「蒐修会」が結成された。

この会は、僧侶としての実践の基礎を学びあい、年会費ゼロの運営費で始め、半年後には教区から援助金をもらうほどの組織となった。初期の大きな活動として、統一教本を作成した。福井県は福井市、越前市等の地域で法要の仕方やお経の読み方、用いる経典などが若干異なっていた。そこで、各地に在住する蒐修会のメンバーで協力し、福井県内各地域の方法を掲載した統一教本を作った。従来、すべてのやり方に対応するためには、例えば葬儀の際、３冊の経典を持つなどの方法だったが、以後、その１冊で済むようになり、同書は県内外に大きな反響を呼んだ。

長亨２（1488）年に建立された別格本山の引接寺は越前市にある。引接寺は宗門として伝統法要を継承する福井県を代表する寺院である。実践仏教の勉強と寺院維持継続のため、蒐修会メンバー共通の課題として、同寺院の年中行事に可能な限りメンバーが参加するようにした。落語会など様々なイベントの運営開催を検討し、地域の人びとが徐々に集

まるようになった、本堂は300人収容できるが、３年前には数百脚のイスを寄付できた。さらに教区として、「よくする会」を作り、法儀団や布教団、蒐修会のリーダーたちが率直に議論して、運営協力を行っている。

メンバーはこの経験を活かし、自坊で、法要後に布教師として互いに交流を持っている。経験が少ない場合、短時間での経験を積むように工夫し、たとえば、「布教リレー」として一人10分程度の短い法話を５人で行うなどもしてきた。その後も隔月で声明や法話などの技術向上を目指した研修会を続けている。

伊妻師は蒐修会で８年間会長を務め、滋賀県東近江市の光林寺に請われ、滋賀県に転居する時期に会長を辞し、現在の会長は５代目である。伊妻師は、越前市大滝の安楽寺の住職も兼ねており、元会長として若手僧侶をサポートしている。

筆者は、2017年11月に引接寺で行われた十夜会を見学し、法要に参加し、若手僧侶の法話を聞いた。また、それをリードする布教師の法話もうかがい、その後、滋賀県内で僧侶たちが、実践力向上のため研修を行っている様子を見学した。

（３）亀山若手僧侶の会 SANGA

天台真盛宗の長賢寺住職松田哲明師は、亀山市内など他派の住職たちとともに超教派による「亀山若手僧侶の会 SANGA」で活動している。天台宗や浄土真宗、臨済宗、法華宗など、宗派が異なる僧侶９人で、毎月２回、コミュニティセンターなどで法話を行い、通仏教の浸透をはかっている。

松田師が所属する亀山地区の仏教会は、毎年、研修会と旅行会、花祭りなどを通じた住職同士の交流がある。また、仏教聖典普及活動などで知られる仏教伝道協会の理念に共鳴する松田師は、宗派別の活動だけではなく、それぞれの地域社会における意欲的な多宗派の住職のつながりが重要だと考えている。その考えに共鳴する人びとが SANGA に集った。

SANGA のメンバーは、毎月の法話活動を基本にしている。法話を担当する住職たちは、①自らの宗派に特化した話をしない、②他寺院の批判をしない、③質問への回答として「自分はこう考えるけど、詳しくは旦那寺に尋ねてください」と述べるなどの配慮をして、通仏教活動であることを強く意識しているという。

2016年３月には、第１回「お寺と地域を考える」会を開催し、亀山市内外の住職方、檀家総代や地域住民ら約60人を集め、さらに2017年３月に第２回「看取る」をテーマに人生の最期をともに迎えるという研修会では、約80人が参加するほど盛況となった。これらの活動は Facebook で報告され反響も良く、順調に活動を続けている。2018年も積極的な活動をし、秋には、診察所を営みながら高齢者訪問医療診察に尽力する医師のドキュメンタリー映画の上映に協力し、トークショーなども行っている。

参加メンバーの寺院のある亀山市などでは、三世代が同居もしくは敷地内に住む檀家も

多く、伝統文化の伝承もしやすい実感があるようだ。松田師の寺院でも、整備も檀家総代や双盤講の人々などが全面的に協力している。人は文化に支えられていると考える松田師は、信仰・道徳・優しさ・祈りの思いなどは、地域の文化により守り伝えられると考えている。それは、難しい経典を説明するより、余程、人々の心に響き、それにより、宗教心が育まれていくと考えている。60歳を超える年齢の松田師は、自らより若い世代の僧侶たちに、幅広い経験を積むようサポートしている。

このように、同宗派で組織された組織と、超教派による組織は、いずれも現職の僧侶として、檀家以外とのつながり・かかわりをもたらす。住職自身で見聞を広めることができ、また、それが檀家の方々にも仏教的に、あるいは人間的に広く深める効果をもたらしているのだと思われる。

5．檀信徒とともに

（1）こども会

ブランド米「伊賀米」の産地としても有名な、伊賀市小杉という農村で、浄土宗長泉寺は、1961年に地域から要請され、50年以上も小学生対象に本堂で日曜学校「杉の子こども会」を続けている。約300人の日曜学校卒業生を出した。

佛教大学卒業後すぐ祖父の後を継いで住職となった前住職角田誠堂師が、住職夫人や檀家総代の方々の支えのもと、続けてきた。誠堂師は隣接する滋賀県で小中学校教員（教育委員会や教頭、校長も）勤め、同寺院の住職を続け、所属宗派の布教師として全国に出かけ、教員退職後も本山で役職を務めるなど、寺院外での活動も極めて多忙に過ごした。10年ほど前に小学校教諭の息子へ住職を交替し、同時にこども会指導も次世代へ譲った。同会は2012年「仏教精神に基づき青少年の情操教化に活躍」したとして正力松太郎賞も受賞した。

同寺では、吉水流御詠歌が盛んで、年代別・性別に組を作っている。2015年12月には60周年大会を本堂で行った。全曲を、そしてこどもたちも少しずつでも詠ぜられるような指導が行われている。

また、同地域では、３宗派11ヵ寺で「柘植仏教会」が結成され、戦後70年も活動を続けている。現在も年２回会報を発行し、５月には合同の花祭りを行い小学生たちが参加し、厳冬期に地域の檀家を廻る托鉢をしている。

日曜学校は、田植えの時期などは休むが、それ以外は今も年間を通じた活動を行っています。同地も少子化が進み、筆者が参加した2017年のこども会参加小学生は11名（所属小学校は全校で117名）だった。この８月１～２日のこども会「夏季合宿」には、全学年がみな参加していた。初日は、宿題の時間、おやつ、地域の歴史のお話（見学）、肝試し、

花火、本堂でのお泊り。翌日はラジオ体操、駆けっこ、写生会（阿弥陀様、写真）、お掃除となごやかな楽しい時間を過ごしていた。筆者も見学し、こどもたちと話した。写生会の作品は秋に開かれる地域の文化祭行事で展示した後、各家庭に戻されるが、小学時代に孫が描いた６枚の阿弥陀様の絵を飾って眺めている家も少なくない。人懐っこく、こどもらしい行動の一方で、夏季合宿を取り仕切った住職夫人によれば、通知表などを家族に見せた後、仏壇に上げて仏様に手を合わせるのが当たり前にしている様子だという。このような形での仏教教育は、今もなおあることを知った。もう10年以上もこどもたちと向き合ってきた住職夫人は、こども会を卒業した子たちが、夏季合宿の肝試しなどで協力してくれるなど縦のつながりがあることの重要性を指摘し、人のつながりによる維持継続を実感した。

（２）札所をめぐる人びと

名古屋市覚王山日泰寺の周辺には、弘法大師八十八ヶ所の札所がある。

毎月21日の縁日（弘法大師）、名古屋市内や近隣市などから来る人びとがいる。本科研メンバー４人は、2018年１月21日、初弘法の日に、日泰寺周辺の札所を訪ねた。午前中、地下鉄覚王山の駅出口から、日泰寺までの参道には、出店が多数あり、また、一般店舗にも多くの人びとが買い物や飲食に興じている様子が見て取れた。

それぞれの札所も、人びとは各々のペースで参拝して回っていた。それぞれの札所を守っている方々に伺うと、四日市市や名古屋市中村区など覚王山から離れた地に住む人々もいた。札所で参拝者に対応する人びとは、自らの上世代の信仰を、自らの世代では受け継ぎたいとの強い思いを述べていた。それぞれ語られるエピソードは異なるものの、札所に参りにくる人々への「お下がり」にかかる費用などは、個々の持ち出しになるにもかかわらず、弘法大師への強い信仰に支えられている様子がわかった。

また、参詣者たちは、高齢者から中年、さらに若い世代の人びとがいた。なかには幼稚園児を連れた若い母親や家族での姿も見られた。彼ら・彼女らも、毎月ここに来ることの意義を次につなげたいという思いを持っていた。

だが、札所としての場所はあるものの、開かれていない箇所もいくつか見られた。それぞれ、次世代継承がある程度うまくいっている部分、そうなっていない部分を確認した。

（３）嵯峨嵐山地域の人びと

郭育仁は、文化と経済の調和による地域振興の結果が「観光」そのものと考え、生活者でありつつ商業者的側面を持つ「暮らしの流儀」に着目し、「地域の公の事務」、「観光文化の創造に伴う事務の考案と実施」、「自らの生業への継承と創造」を自らの責務と考え行動する住民の主体性を問題提起し研究している［郭 2011 他］。

京都市右京区嵯峨嵐山は、古くより王宮・貴族の別荘地が点在し、世界遺産にもなっている天龍寺、あるいは、法輪寺、野宮神社、愛宕神社など、寺社仏閣を中心とした門前町・氏子地域で栄えている。とりわけ、天龍寺領だったかつての時代より、茶店に対して出された指導のなかから、来訪者をもてなす商業倫理や、自然環境の維持、桜の植樹などといった地域の生き方を窺い知れ、今日に至って脈々と継承されている。

同地で10年以上フィールドワークを続けている郭の紹介もあり、2018年５月、同地で祭の見学や関係者へのインタビューなどを実施した。

寺社仏閣における町内会・講組織会の歴史と変遷と、祭礼行事および観光イベントを執り行うメンバーシップの関係性について、嵯峨嵐山おもてなしビジョン推進協議会のリーダーに、関与している天龍寺、野宮神社、化野念仏寺、本能寺などのことを中心に伺った。とくに、商店と神社仏閣の関係について、年中行事を通じた、商業者と宗教法人との関係が興味深かった。嵯峨は上と下で地区の特徴が異なるが、商業地区の下で５つの商店街が一緒になって、寺社の年中行事に主体的にかかわっていた。次世代への継承として、祭りについては、小学生からこども神輿を実施し、高校生などには大人の神輿に徐々に参加させるような試みをしていることがわかった。観光客がたくさん来ている状況をさらに継続するための努力があるという。

続いて、野宮神社宮司から、嵯峨祭・斎宮行列などの年中行事の現況、地域社会とのつながりについてうかがった。化野念仏寺と大覚寺を見学し、同日開催されていた嵯峨祭・還幸祭も見学した。観光客を迎え入れつつ、地元の行事として祭りを行っている様子が見て取れた。さらに、天龍寺の宗務総長から、天龍寺の過去と現在、次世代育成に関してうかがい、観光客を多数迎え入れていても、なお、地域との関係性を重視していることを改めて確認できた。

おわりに

本科研は２年目であるが、上記述べてきた状況を踏まえ、次のような結果を予想する。「過疎地域の活性化のヒントの提示」である。

仏教寺院のような宗教集団は地域住民から信頼され、年齢階梯集団の活動、年中行事や回忌法要で地域住民と定期的にかかわりを持ってきた。他出した人びとも関係を継続し、結果的にＵターンなど、再度深い関係を持つ契機にもなる［川又 2016c］。宗教者も職業人と考えるならば、青年宗教教師が地域に定着し活動することで同世代との連携を生み、それらの人びとが地域ネットワーク拠点となる。宗教教師自身は地域社会で外の地域と内の集団を結びつける結節点でもある［川又 2015a］。

代表者・分担者たちが見出した宗教集団の例を、他地域においても比較検討を続けることで、過疎地域での「人口維持」「地域ネットワーク」問題解決は、まれなことではない

と示せるのではないだろうか。

また、家庭や地域社会が持っていた社会教育の機能をすべて「学校」に移した弊害は上記の通りである。一般企業でもOJT（On-the-Job Training）研修など実践的学びがあり、教育・福祉などでは研修として事例検討などがしばしば見られる。教職現場での研修については、先述の通りである。そして、地域社会で宗教集団が続けてきた「次世代教化システム」はまさにこれらと同一と見なせる。教義など宗教ゆえの部分も見出されるが、それらを分別し、他集団に参照可能な内容を抽出することができよう。

今後も、宗教集団ベースとなっている年齢階梯集団の地域形成力について、他事例を探し検討していきたい。それぞれのシステム化と軸となる数人は必要だが、それがあれば、長年の維持可能性はすでに示されている［川又 2018a 他］。「人生100年時代」とも言われているなかで［川又 2018b］地域社会のさまざまな継承は、「次世代教化システム」を利用することで可能になるのではないだろうか。

脚註

（1） 本稿は、JSPS 科研費17K02243の助成を受けた研究成果である。

（2）「過疎地域における宗教ネットワークと老年期宗教指導者に関する宗教社会学的研究」（2011-13年、基盤C代表）及び、「人口減少社会におけるウェルビーイングの実現と現代宗教の役割」（2015-17年、基盤B分担［代表櫻井義秀北海道大学大学院教授］）のことである。

（3） 現在、筆者らは勤務校にて、「養護教諭・栄養教諭など少数職種者への効果的な研修」というテーマで、平成30年度「教員の養成・採用・研修の一体的改革推進事業」に採択され、当該研究を進めている。（文部科学省　http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/sankou/1409693.htm 2018年10月10日最終閲覧）

（4） 以下の事例のうち、三曹青は［川又 2015b］で、蒐修会と SANGA は［川又 2017b］で、杉の子こども会は［川又 2017a］で紹介している。

参照文献

Eileen, Barker, 2011 “Ageing in New Religions: The Varieties of Later Experiences.” Diskus: The Journal of the British Association for the Study of Religions, 12, 1-23

江島尚俊他編、2014、近代日本の大学と宗教、法藏館

江島尚俊他編、2017、戦時日本の大学と宗教、法藏館

冬月律、2013、過疎地域と神社をめぐる実態調査研究史、國學院大學研究開発推進センター研究紀要、7、159-197

冬月律、2015、過疎地域の神社神道の現状と課題―高知県の過疎集落神社を事例に―、國學院雑誌、115、55-68

冬月律、2016、過疎と宗教―30年をふりかえる―、櫻井義秀他編、人口減少社会と寺院、法藏館、41-66

郭育仁、2011、『地域の精神』は観光振興にはどう活かされるべきか―京都・嵯峨嵐山における中国語圏インバウンド観光に関する取り組みから―、日本観光研究学会全国大会学術論文集、26、173-176

郭育仁、2012、地域観光政策をめぐって、宗教行事と地域振興の狭間に関する一考察―木之本地蔵大縁日を中心に―、国際文化政策（国際文化政策研究教育学会）、3、49-56

川又俊則、2006、キリスト教会を継ぐ者の語り―〈牧師夫人〉の母から娘へ―、川又俊則他編、

ライフヒストリーの宗教社会学、ハーベスト社、105-126
川又俊則、2009、〈いのち〉と〈宗教〉の教育実践の考察―三重県内の学校を中心に―、宗教学論集、28、89-119
川又俊則、2014a、地域社会で育む子どもの成長―答志の寝屋の母と父と子―、小堀哲郎編、地域に生きる子どもたち、創成社、204-224
川又俊則、2014b、人口減少時代の宗教―高齢宗教者と信者の実態を中心に―、宗務時報、118、1-18
川又俊則、2015a、宗教指導者たちの後継者問題―昭和一ケタ世代から団塊世代へ―、現代宗教2014、国際宗教研究所、115-139
川又俊則、2015b、過疎にめげず地域との繋がりを求める寺院の奮闘、月刊住職、490、46-52
川又俊則、2016a、門徒が維持してきた宗教講―真宗高田派七里講―、櫻井義秀他編、人口減少社会と寺院、法藏館、259-287
川又俊則、2016b、人口減少時代の教団生存戦略―三重県の伝統仏教とキリスト教の事例―、寺田喜朗他編、近現代日本の宗教変動、ハーベスト社、249-289
川又俊則、2016c、年齢層差にみる檀信徒―初めての人口減少期を迎えた檀信徒と寺院―、曹洞宗総合研究センター学術大会紀要、16、260-268
川又俊則、2017a、寺院生存戦略としても不可欠な青少年教化の現況、月刊住職、519、88-95
川又俊則、2017b、人口減少の中で寺院存続に必要な住職力と組織力、月刊住職、520、106-113
川又俊則、2018a、信仰を支えあう幸せ―「協働」牧会による多世代地域間交流―、櫻井義秀編、しあわせの宗教学、法藏館、101-129
川又俊則、2018b、多様性社会における実践研究と人生100年時代、東海学校保健研究、42（1）、1-2
小林奈央子、2011、南無の道はひとつ―ある女性行者の衆生救済―、女性と仏教東海・関東ネットワーク編、新・仏教とジェンダー―女性たちの挑戦―、梨の木舎、284-292
小林奈央子、2013a、御嶽講登拝を支えた女性強力、宗教民俗研究、21・22、65-87
小林奈央子、2013b、〈越境〉する行者たち―東海地方の木曾御嶽講を事例として―、長谷部八朗編、講研究の可能性、慶友社、255-300
小林奈央子、2014、講を継承するしくみと工夫―尾州鷹羽講の組織と運営―、長谷部八朗編、「講」研究の可能性Ⅱ、慶友社、162-193
国際宗教研究所編（弓山達也責任編集）、2006、現代における宗教者の育成、大正大学出版会
Robert, Wuthnow, 2005, “Depopulation and Rural Churches in Kansas.1950-1980.”Great Plains Research:A Journal of Natural and Social Sciences, 15（1）, 117-134
徳野貞雄他、2014、T型集落点検とライフヒストリーでみえる家族・集落・女性の底力―限界集落論を超えて―、農山漁村文化協会
山下祐介、2012、限界集落の真実―過疎の村は消えるか―、ちくま新書

キーワード　次世代教化システム、宗教教師、現職研修、信仰継承、地域社会